

意見陳述

北村親雄（松山市在住）

私は松山市在住で、職業は沖縄の弦楽器の三線を作っている。沖縄県を除けば数人いるかないかというレッドデータに分類されるような仕事で、長野県長野市で営んでいた工房を閉じて昨年8月に石手寺の北東に位置する小集落にある自宅の隣に工房を開設し、三線の製作販売や修理、演奏や手ほどきを生業にしている。自宅から歩いて十数分の所に瀬戸風峠があって、そこは道後温泉の北側の背後に続く小高い場所にあり展望がとても良い所だ。

眼下に松山城と松山の街並みを一望に見渡せて、遠くに伊予灘を望み、左側に三崎半島が伸びて一幅の絵のような景色が広がる。写真愛好家が「ダルマタ日」をねらってカメラを構えている姿も見受けられる、そんなのどかとも言える瀬戸風峠から、澄み渡った天気の良い日は三崎半島の半ばに白く光る3つの点が見える。伊方原発だ！まさかと思うが肉眼で伊方原発が見えるのだ。一気に気分が重くなる。直線で60km弱、県庁まで55km弱の距離だ。福島原発事故で大きな被害を受け未だ受け続けている相馬市の北部や丸森町、いわき市南部と同じような距離だ。現実「すぐそこ」に存在し、自分が原発の近くに住んでいるのだという事実を突きつけられて複雑で憂鬱な気持ちになる。日常生活では意識の外にあり感覚的には離れていると思っけていても、伊方原発はこんなにも近くにあり、松山も伊方原発と隣り合わせと言っても過言ではない。もし伊方原発で事故が起きれば大きな影響を受けるのは確実だ。チェルノブイリ原発事故や福島原発事故を見れば明らかなように放射能に県境や国境は無い。それは海を挟んで大分や広島や山口でも伊方原発運転差し止めの声が広がり訴訟も起こされていることにもあらわれている。

昨年1月末に当訴訟の原告だった私の連れ合いが死去した。原発のない社会を目指して共に歩んできた彼女の、道半ばで果たせなかった遺志を受け継いで6次訴訟の原告になった。息子にも母の遺志を継がないかと聞くと、すんなり受け入れて今回の原告に共に名を連ねている。嬉しい気持ちの反面、私たちの世代で廃炉にしたいと活動してきたにもかかわらず今もって原発を存続させていることに悔しさと怒りがこみ上げて複雑な気持ちに

なる。昨年 3 月に産まれた孫も含めて次世代に負の遺産を残してしまっていることは本当に心苦しい限りだ。

思い返すと、1979 年 3 月 28 日スリーマイル島原発事故、1986 年 4 月 26 日チェルノブイリ原発事故と重大な事故が起き、日本でも反対運動が広がり脱原発を求める声が大きくなる中、ここ愛媛県では 1988 年 2 月 12 日伊方原発出力調整実験が行われた。

中止を求めて愛媛、四国、全国各地で反対運動が続いた。実験の前日には高松市の四国電力本社ビルに大勢の人が詰めかけて抗議行動を繰り広げた。四電側との交渉には薦田弁護士も立ち会い、多数の人々が徹夜での粘り強い交渉を続けたが実験は強行された。抗議行動にはたくさんの若い男女や子ども連れも参加し、私の連れ合いも当時 2 歳 8 ヶ月の息子と一緒にその中にいた。私は松山で仕事をしていて、事故が起きるかもしれないという不安の中で二人が少しでも伊方原発から遠くに離れていてほしいと思ったことや、最悪の場合は会えなくなるかもしれないとまで考えたことを思い出す。私だけでなく多くの人たちが不安の一日を過ごしたと思う。「大げさだ」と言われるかもしれないが、2011 年 3 月 11 日の福島原発の事故を経験した後では、この気持ちを理解してもらえらると思っている。

周知の通り福島原発事故は多くの犠牲を生んだ。環境を破壊し、広範囲に放射能をまき散らした。直接・間接的に大勢の人が亡くなり、行方不明者も未だ多くいる。故郷を追われ、事故から 12 年以上たっても自分の家や土地に帰れずにいる人が数多くいる。子どもたちに内部被曝による甲状腺疾患が増えたことも事実だ。それだけではない、事故処理に関わる作業員や関係者の被曝も現在進行形で数多く起きている。言うまでも無く日本社会の「経済的発展」が大きく阻害されたことは既知の事実だ。

私は 2011 年 3 月 11 日の東日本大地震・福島原発事故当時は親の介護で長野県長野市に移り住んでいた。翌 3 月 12 日早朝、マグニチュード 6.7 震度 6 強の長野県北部大地震が発生した。震源は長野県栄村と新潟県津南町を中心とする雪深い地域でその被害の実態は雪解けと共に拡大し甚大な被害が報告されている。3 人が関連死、怪我人 67 人、家屋全壊 63 半壊 334 件、雪崩も誘発して道路は寸断され鉄路は崩落した。震源地は県境付近で東京電力柏崎刈羽原発の南に位置していて、同原発と栄村の距離は 49 km 弱、福島のような事故につながらなかったのは不幸中の幸いだったと言える。

福島原発事故による放射能は各地で広範囲にわたり検出され、東日本は大混乱に陥った。長野県でも基準値以上の放射能が県内の多数の地域で検出された。放射能汚染により、農産物、畜産物、山菜や野性獣の肉までが流通禁止となり関連する職業の人々の生活をも脅かし、消費者は汚染されていない物を必死で探し求めた。新聞やテレビでは毎日各地域で検出された放射能値を報道し、今のコロナウィルス感染者一覧表のように紙面に載り画面に映った。放射能測定器を求める人が殺到し入手困難な状況も続いた。食物の放射能値を計る機器は当初保健所に設置されたが数が足りず、団体やグループ・個人で購入して測定し自己防衛をはかるしかない状況も続いて、パニックに陥る人も数多く混乱が続いた。特に子どもや病人を抱える人たちは本当に切実な思いをしたと思う。原発事故の影響は計り知れないものだ。

そもそも原発は「トイレのないマンション」と称される。現代の進歩する科学技術ならば「核のゴミ」はすぐに解決できるとして見切り発車したが、未だにその技術は確立しえず、使用済み燃料も核廃棄物も増え続けるばかりだ。それらの放射性廃棄物管理には半永久的な時間がかかる。当然のことながら、稼働し続ければするほど「核のゴミ」は増え続けその分危険性も増大する。そしてそれを担わなければならないのはこれから先の世代だ。私たちが作った「核のゴミ」をこれから先の世代に押し付けることは無責任であり、せめてもの償いとして私たちの手で断ち切るのが責務である。

地震、津波、原発事故が起きた時、特に最悪の複合事故が起きた時に本当に住民は避難出来るのか？ 3年前に伊方原発の西にある集落に行った時につくづくそう思った。くねくねと曲がりくねった道を下ると、前に海を抱え、後ろに山が迫る集落がある。急坂に一人が通るほどの石段の続く道が頂上道路に抜ける道だという。重大事故が起きた場合の避難は困難を極めるであろうことは誰の目にも明らかだろう。現実には避難するのは机上に地図を広げて将棋の駒を動かすようなわけにはいかないからだ。

避難計画は、策定に当たって実際に現地に行ってその地形や地理的な状況、住む人の年齢構成や健康状況等を調べた上で、最悪の事態を想定して作ったものでなければ絵に描いた餅にすぎない。地域の実情に即した実効性あるものでないと人命は救えない。

実効性のある万全な避難計画が求められる中、昨年 10 月 12 日に伊方原発重大事故を想定した避難訓練が行われ、テレビや新聞でも報道された。準備された船に乗り込む高校生たちや、孤立集落と想定された人たちの映像が流れ写真が掲載された。高校生たちも参

加者たちも何も持たず、20 マイクロシーベルト超の放射線が検出されたという想定 of 訓練だというのが、住民は救命具を着けただけの姿で誘導関係者すら放射線防護服も着ていない。緊急災害時の為にと各家庭や学校で備え持つはずの用具や用品も見当たらない。不自然だ、何かおかしいと「?」「?」マークが頭に浮かび違和感と不信感がつくる。実際に起きた事故に対応するための訓練なら、もっと現実味を帯びた訓練でなければ実効性はない。重大事故の想定ではないのか。もし道路が寸断され津波で港も使えない場合はどうするのだろう。訓練のための訓練では実際に事故が起きたときに人命を救うことはできない。原発が現に存在してしまっている今、避難訓練することを否定しているのではない。このところ全国で大規模災害が頻発していて、その象徴的なものが東北地方を襲った大地震、津波、福島原発事故だ。あの不幸な経験をもとにして、当地に重ね合わせて作ったものかが問われるのではないだろうか。

「一人も取り残さない」避難ができないならば、今すぐに原発の運転を止めなければならない。

繰り返すが、私たちには次世代への責任がある。彼ら彼女らから「遅すぎる！」というそしりを受けたとしても返す言葉も無い。せめて今私たちがやるべきこと、出来ることに力を尽くすことが未来に向けて誠意を示すことになる。今廃炉にしなければ本当に禍根を残す。

これまで長きにわたって原発の危険性を訴え廃炉を求めながら、どれほど多くの方が亡くなられたことだろうか。伊方原発反対八西連絡協議会の廣野房一さん、南海日々新聞の社主でもあった齊間満さん、同じく記者の近藤誠さん、大阪大学理学部講師のかたわら原発を訴え続けた久米三四郎さんをはじめ原発の危険性と愚かさを訴え続けて活動した数多くの方々が鬼籍に入られた。皆さんの懐かしい顔が思い浮かぶ。時には怒りと絶望や失意に陥りながら、それでも権力におもねず、地域と未来を守るために私利私欲なくひたすら原発の無い社会を目指して貫き通した先人たちに思いを馳せる。その思いを受け継いで、全国のそして全世界の方々と共に、今生きている私たちが原発のない社会を作るために全力で取り組むことをあらためて誓いたいと思う。

金力や権力にまみれた「原子カムラ」に群がる政治家や企業は、取り返しのつかない莫大な犠牲を強いた事実を無視して、福島原発事故が無かったかのように原発回帰を目指している。岸田政権は臆面もなく方針転換を表明して昨年未から矢継ぎ早に軍拡（戦争でき

る国) と原発回帰へと大きく舵を切った。まさにトランスフォーメーションといえる。GXとは軍拡と原発推進の二つの意味かと笑えない冗談に背筋が凍る。原発運転期間 60 年超を可能にし、次世代型の原発を開発促進し、脱炭素化の為にも原発は必要との見解を出した。福島原発事故の経験をふまえて「可能な限り原発依存度を減らす」方針を出したのは一体誰か。

我々人類はこれまでスリーマイル島原発事故、チェルノブイリ原発事故、福島原発事故等々幾たびも負の遺産を築き上げてきてしまった。過去に学ぶことができなければ、再び過ちを犯すことになる。原発は安全で管理可能であり事故は起こらないと本当に考える人はいるのだろうか。もしそうなら福島で起きた巨大事故をはじめとする多くの事故は何故起きたのか。原発は制御が困難な発電装置であり明らかに危険だ。「想定外」では許されない。

命の尊さは何物にも代えがたい。平和で安全な社会、安心して健康に暮らす穏やかな生活を求めることは人間として当然の権利である。重ねて言うが、そのような安全で安心な社会を作ることは今を生きる私たち世代の責任である。

現在ある使用済み核燃料や核廃棄物は遠い将来にまでその危険で困難な管理を託さざるを得ないのである。各電力会社も原発推進者も、未だ作ることが出来ないトイレを夢見て、危険を垂れ流し続けることがいかに愚かで未来への破壊行為であることを認めるべきだ。原発の維持や終わりのない安全対策には巨額の費用がかかる。そのうえ重大事故を起こした場合に生ずる賠償や後処理にかかる費用は莫大であり企業として存続できるのだろうか。計り知れないリスクを選択するよりも安全な代替電源を作り社会に貢献することに尽力してほしい。今こそ勇気を持って原発を中止する時だ。

四国電力は現在定期点検で停止している原発を再稼働することなく、原発のない、原発に頼らない新しい未来を私たちと共に考え実現しようではないか。

代理人の方々にも是非その一助を担っていただくことを切に希望する。

裁判官の皆さま、熟慮を重ね倫理に基づく後世に誇れる判断を下されますよう心よりお願い申し上げます。